歩くマニュアルをめざして

「共選で出せなかったモモを持ち帰って、自分で箱に詰め替えるのはたいへんな作業でした」

もう一つの課題をそう振り返ったのは、今年、農家の道へ踏みだした竹井和紀さん(49)。これまでは飲食業に従事するかたわら、父親の作業を手伝う、いわゆる兼業農家だった。

管内では、例年六月中旬からモモの出荷が始まる。農家は早朝から収穫・出荷し、共選基準に合わなかったものを個選していると、もう炎天下の昼に。別の作業に取りかかれるのは午後からといった、せわしない日々を余儀なくされていた。

「担い手が高齢化し、生産者も減るなか、少しでも楽に出荷できるよう変えられないか。そんな声を部会のみなさんからいただき、わたしも同じ思いでした。出荷基準の統一と併せて、新基準のブランドを作る必要性を痛感しました」(竹川さん)

市場やバイヤーに聞き取り調査をすると、完璧な品質でなくても手ごろな価格で買えるものに需要があるとわかった。

「各共選所にあった基準を参考にしつつ、部会員とわたしたちTAC、販売担当も加わり、糖度や見た目の基準を協議していきました」(竹川さん)

こうして出荷の統一基準を発表した翌年、レギュラー品とは別の新しいブランド、「甘助」がお披露目された。

「『甘助』のおかげで作業時間が短縮され、しっかりと休憩できます。今後、就農する人も増えるかもしれませんね」

七月上旬の早朝六時、県オリジナル品種『夢みずき』の樹の下で竹井さんがそう話しかけると、横で生育状況を確認していた竹川さんがほほ笑んだ。

「いつでも駆けつけ、栽培技術を的確に教えてくれるから頼りになる」との竹井さんの称賛に、竹川さんが堂々と答える。

「現場を見て担い手の声を吸収しつつ、研修会などで最新の栽培技術も得られる。担い手にとって〝歩くマニュアル〟のようになれたら」

その誠実さが担い手の信頼を生む。額の汗がきらめく。

JAフルーツ山梨では、指導業務を中心としたTAC活動を展開している。「技術的な内容を問われることも多く、可能なかぎり、迅速に回答することを心がけています。やっぱり頼ってもらいたいので」と竹川さん

「若手はみんな優秀で、信頼を集めています」と部下をたたえるのは同JAの営農指導部次長兼指導課長の久保田和成さん(53)。「食に携わる者には日本の農業が好きという思いがあるはず。それを次世代にどう継承するか考えていきたい」

モチベーションアップの仕組みづくり

2007年からTACを設置し、現在は27人(管理者1人含む)を4ブロックに分けて配置。ふだんから担い手に出向き、コミュニケーションを重ねる指導課の職員が、TAC活動を兼任する。「若手のやる気を引き出したい」と語るのは久保田次長。年に1回、JA内でTACパワーアップ大会を開催し、たがいに高め合っている。「TAC個人が持っている強みを、さらに生かせるよう体制を見直しました。現場の声はほんとうに貴重。困ってなくても会いに行こうと、日々伝えています」と続けた。

JAフルーツ山梨

甲州市、山梨市、笛吹市(一部)の3市を管内とする。山梨県下の果樹生産量の4割以上を占め、2024年度の販売事業の売り上げは、果実と野菜などで約208億円を誇る。ブドウ・モモを中心にスモモ・カキ・サクランボなど、JAの名前からわかるとおり、さまざまなフルーツの生産が行われている。

JAフルーツ山梨のウェブサイト

「甘助」は、県が誇る戦国武将・武田信玄の、軍師である山本勘助の名をもじった

二元集荷先の一つである「かのいわ中央共選所」。併設する直売所には、「甘助」も並ぶ

Z-GISの活用により「目合わせ会」を円滑に運営

統一した品質で市場にモモを出荷するためには、新たな出荷基準に沿った「サンプル」を提示し、意識を一つにまとめる必要がある。活用したのがJA全農の営農管理システム「Z-GIS」だ。サンプルが必要となる品種の圃場を登録し、採取の手間を省力化。採取したモモはそのつど、写真を撮影し、採取できない場合に備える。現在は担い手がどこでも・いつでも確認できるように二次元コード化している。

現場の声こそかけがえのない宝物

イラストはJA全農TAC・営農支援課と地上編集部によるコラボキャラクター「TACマン」

TACについての詳しい情報は、JA全農HPのTAC紹介ページまで(https://www.zennoh.or.jp/tac/)

［じっくり話し合おう］営農に関する困り事をTACと共有してみませんか。よりよい方向に進むため、なにができるか、共に考えよう

新たなブランドを生み出し担い手の負担を軽減

——山梨県 JAフルーツ山梨

産地のブランドを守るために定められているのが等階級だ。しかし、その厳密さが担い手に負担を生んでしまうこともある。既存の基準を見直すことで出荷作業の負担を軽減し、さらには、新たなブランドを立ち上げて農家所得の向上につなげた気鋭のTAC(地域農業の担い手に出向く担当者)がいる。まず担い手に会いに行くという、ひたむきな姿勢に注目する。

福地大亮=写真 *photo by Daisuke Fukuchi*
JA全農TAC・営農支援課=企画協力

TAC 未来を見つめる 担い手とTAC

このコーナーでは、地域の担い手とTACが〝未来の農業〟のために取り組む活動を、全国のみなさんにお届けします



写真左からモモ農家の竹井さん、JAフルーツ山梨の竹川さん。地元が同じ二人は、家族同士の交流もあり、縁が深い。「よく知っているからこそ顔を合わせても、モモの話しかしない」と二人は笑う。新規就農した竹井さんに「ありがたい」と竹川さん

「これがなくては、産地を語れない。産地を代表するフルーツの一つがモモなんです」

力を込めてそう語るのは、JAフルーツ山梨加納岩支所山梨ブロック指導課の竹川要さん(28)。二〇二〇年に入組以来、営農指導部に所属し、TACとして活躍してきた。

〇一年に一〇JAが合併して誕生したJAフルーツ山梨は、甲府盆地の東側に位置し、フルーツ王国・山梨県の果樹生産量の四割以上を占める。そんな果樹の大産地にもモモの出荷に関する課題があった。

一つが、合併以降も各共選所で共選基準が分かれていたことだ。効率化を求める担い手からの要望を受け、各地区の部会の役員から成る「山梨ブロック露地桃統一販売運営委員会」を発足。半年以上にわたる話し合いのすえ、出荷基準を統一し、二つの共選所による「二元集荷一元販売」を実現した。

「六年めの自分には難しい挑戦でしたが、担い手のみなさんに支えてもらいました」

と竹川さんは謙虚に語る。